6 月 18 日のメッセージ

聖書：使徒言行録　4：　5 – 12

「この名のほか、与えられていない」

学生たちのコメントシートで毎年、何人かが同じ質問をしてきます。「この授業には何の意味があるのですか。」と。いわゆる「正解」を与えられることに慣れ過ぎて、自分で考えることを忘れてしまったかのような質問です。

その意味では、「自分でその意味を探していくことが学びだ」というのが「正解」なのかもしれません。でも、それを言ってしまうと、今度は、「その答えを得たことに満足してしまって結局何も学ばない」ことになるので、敢えて言わないようにしています。

そのような彼らだから、自慢げに「本を読んでいる」と言って例示される本は、決まってビジネス書ばかり。正解探しを繰り返し、自分に自信をつけたいのでしょう。

当たり前のことですが、人生に「正解」はありません。勝手に「正解」だと思い込んで突き進んだ結果、ますます自信を失う人は、書物の中でも現実でも、枚挙に暇がありません。

聖書も己の力を過信することを戒めています(「あなたは、『自分の力と手の働きで、この富を築いた』などと考えてはならない。」申命記 8:17)。あなたが置くべき信頼は自らの内にあるのではなく、あなたを造り、守り、支えてくださる神にのみあるのだ、と(「むしろ、あなたの神、主を思い起こしなさい。富を築く力をあなたに与えられたのは主であり、主が先祖に誓われた契約を果たして、今日のようにしてくださったのである。」申命記 8:18)。

「でも、何の証拠もないではないか」と、「正解」を求める者たちは言うでしょう。確かに、彼らの求める「正解」「証拠」は与えられないかもしれません。

しかし、神はその時に必要な全てを整えてくださる方であることを私たちは知っています。だから、自分を中心にして、神の力を勝手に限定して恐れるのではなく、神を中心として、神に信頼することが大切です(「イエスは、これを聞いて会堂長に言われた。『恐れることはない。ただ信じなさい。そうすれば、娘は救われる。』」ルカによる福音書 8:50)。また、与えられた成果を自分たちの理解の範囲に押し込めようとしないことも大切です(「そして、使徒たちを真ん中に立たせて、『お前たちは何の権威によって、だれの名によってああいうことをしたのか』と尋問した。」使徒言行録 4:7)。

この世界には人知の及ばない「不思議」がたくさんあります。けれども、その全ては神の世界の内にあることを忘れてはなりません。その中にあって、私たちを救うのはイエス・キリスト以外には存在しないのです(「あなたがたもイスラエルの民全体も知っていただきたい。この人が良くなって、皆さんの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけて殺し、神が死者の中から復活させられたあのナザレの人、イエス・キリストの名によるものです。」使徒言行録 4:10)。

そして、私たちの現実が厳しいものであろうとも、私たちには必ず救いがあると、私たちは信じています。「イエス・キリスト」と告白することは、「イエスの他に、私の救い主はおられない」と告白することと同じです。

「ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」(使徒言行録 4:12)

改めて、私たちの救いがただ神にあること、神が与えてくださったイエスにのみあることを思い起こしたいのです。そして、詩人と共に私たちの信仰を告白したいのです。

「御名に望みをおきます／あなたの慈しみに生きる人に対して恵み深い／あなたの御名に。」(詩編 52:11)